

哲學研究

第四百六十號

第四十卷
第二冊

ゲーテに於ける人間像

フリッツヨアヒム・フォン・リンテレン

谷友幸 譯

I

ゲーテは西歐的人間であり、私たちの人生觀ならびに世界觀の大家であり、眞實は常に中 (Mitte) の眞實であることを認識していた普遍的思索家であつた。確かにゲーテ自身にとつては、人間は、神々しい起源を有する宇宙の、正しく中央に立つてゐるのである。

それにしても、かような精神的な問題は、今日もなお私たちにとつて、果して重要であろうか。すべて、あまりにも陳腐となり、あまりにも局限されたものになつてはいないだろうか。私たちが體驗してきた今次のような悲惨きわまる事件の後では、もはやなにひとつそこから得るものはないのではなからうか。しかも殊更に、なぜ今日もなお、ゲーテを問題にせねばならないのだろうか。ゲーテは、とつくに過ぎ去つた、全く別種の、よく秩序立つた安泰な世界に屬してゐるのではなからうか。むしろキエルケゴールやリルケやハイデッガーなどのほうが、私たちに身近なので

はあるまいか。彼らの問題性は、はるかに強く、現代の不安とか實存の危機に觸れるのである。しかしながら私たちは、あまりにも時代の擡にばかりなつていてはならぬ。いつの時代にも、私たちを根源へと導いてくれる、きわめて偉大な精神があつた。ゲーテは、ファウストを藉りて、こう要求している、「世界がその最も内奥に藏しているものを、私に認識させてくれ。」

それにしても、ゲーテが特に今の時代にむかつて言わんとするものは、なにであろう。疑いもなく彼は、私たちの時代の要求、すなわち潑瀾たる精神が放縱な意志に先立たねばならぬということ、認識していた。動力の恣意にたいする精神的秩序の優位、これこそ私たちの緊急のテーマにはかならぬ。まずこのことについてゲーテの考えを訊くしよう。彼は私たちに精神の優位を教える。しかも、その精神は、ヨーロッパの傳統のなかで偉大となつてきたところの、波瀾に富む精神であり、かつこの傳統は、西歐の諸民族になんらかの點で共通し、遠くその源を古代にまでも遡ることのできる傳統である。すなわち、精神を、神々が人間に授けられた最大の賜物として、是認することのうゑに築かれた傳統であつた。だからこそ、精神は究極の諸認識においても、正に形而上學においても、發言せざるを得ないのである。それは、生々潑瀾たる人間のあらゆる力と接觸しつつ、それゆえエロスによつて残りなく浸透され——眞の人間性を要求するところの精神である。かくしてまた、ギリシア精神とキリスト教的中世がはるかに近く近代にまでも流れ込んで、私たちのところまで傳つてきたのである。しかしながら、最も決定的な點は他でもない。ヨーロッパ特に近代の、そしてドイツの、全精神史を貫いて大きく縦に裂けていくところの緊張、すなわち一方には動力、生々潑瀾たる生成、衝動、性向があり、他方には精神的秩序と律法があるところのはげしい緊張を、みごとに丸く収め得た者こそ、じつはゲーテであるということである。なおこの緊張は、狹義においては——いささか要約しすぎるかもしれないが——ファウスト的衝動すなわち浪漫主義的熱情と規定的な古典主義的形式のあいだの緊張でもあつた。

II

こうした手掛りをゲーテはもつばら自然のなかから発見したのであるが、これこそ決定的な事柄と言わねばならぬ。それではゲーテによれば、精神ならびに自然の現實は、いかなるふう^にに解釋されるであろうか。ゲーテにとつて、精神は、自然のうちなる内^在的^な現實であつた。精神を生命が出迎えるのである。生命は、要するに精神の原型である。自然は、次第に強く精神の刻印を帯びていくところの、精神的秩序の段階構造(Stufenbau)に他ならぬ。有機的生命の諸法則もまたここにある。もとよりかかることはブライトンやアリストテレスも言つていた。アウグスティヌスはすでにこの段階の歌を歌つていたのである。しかしながら、ゲーテと行を共にすれば、官能的ディオニュソスのな力から神の純粹な精神へ到る道を迎ることができ^る。それこそアポロ的な視野に他ならぬ。私たちはゲーテに従つてゆけば、精神的な一王國の眞正な市民となることができ^るわけである。一切は精神によつて浸透され、精神の勢力範圍内にある。しかもその精神は、純粹な抽象や構成の所産ではなくして、内^在的^な現實性、自然の生起そのものの内的現實性、自然の生起そのもの内的法則に他ならない。

ゲーテにおいては、精神は自然ならびに生命と結びついている。私たちは、世界の呼吸するただなかにおいて、例えば波立ち騒ぐ森のなかにおいて、精神に出逢うことさえあるのである。私たちは官能をとおして精神に觸れる。ゲーテは官能に結びついた印象の香りを愛し、事物の息吹の眞近にいたいと願うのである。私たちはひたすら共感のうち自然の懷ろ、自然の心に抱かれる。

今宵またおまえは臘ろの光で

茂みを、谷を、みたし

ついに私の心も

ゲーテに於ける人間像

残りなく融けひろがる。

〔月に寄す〕一七八九年)

官能と精神のこのうえなく深密な接觸は、ゲーテにとつて、眼のなかに存する。肉體の眼は精神の眼と緊密に結びついているのである。だからこそ、望樓守リュンコイスは次のように語るのである（「ファウスト」第二部第一一二八八行）。

物見にと生れこし我、

物を見よと仰せつかりて、

塔に身を誓いてあれば、

實に面白き世界かな。

さらにまた（同第一二三〇〇行）、

汝、幸あるわが眼よ、

汝がかつて見たるもの、

そはたとえ何物なりとも、

實に美しからぬはなし。

心からなる自然への愛のうちに、ゲーテは、このような目出度い現存在を、現存在の充實を求める。だが、かつして現代のような不安とか空虚を求めはしない。また彼は、度外れた、なんら幸福でない、暗鬱な理想主義とか悲劇主義を望みはしない。彼には、どうしてそのようなものが生れねばならないか、その理由が解せないのである。ゲーテはむしろ、靈化した歡びの法則を、快活な天性を、かつてヴァルター・フォン・デル・フォージェルヴァイデが「何人も歡びを持たざれば無用の長物」と語つたような、價値あるものの歡びの序列を知つていたと言つてよい。

ところで、自然の到るところに神々しい精神の莊嚴が現われる。ゲーテは、恭々しく敬虔な態度で、この神々しい精神に向つて歩んでゆく。そうして大いなる優しい愛情をもつて、全自然が示す神なる精神の本源性のまゝに立つ。するとこのとき、神なる精神はまた著しく人間的な様相を帯びているのである。「おお永遠なる者よ、おまえによつてこの身が残りなく充たされたい。」こう叫んで、ゲーテはまた同時に、自然からの近代的な神性剝奪 (Entgotting) にたいしても、反對を表明する。——なおここで、さらに微妙な態度に注目しておかねばならぬ。すなわち、究極の宗教的な秘密の崇高性にたいする畏懼が、ここに示されているのである。私たちはなんとしても、かのドストイェフスキーの言葉を用うれば、ただ三次元の概念で把握することしかできないのであるが、しかし、鈍く減じられた神々しい光のみは肉眼にも看取されるのである。たしかに「蝶よ、おまえは光をむさぼつて、ついには身を焼かれる」のである。神なる思想も、形而上的認識を軀り立てる嵐のような性急さのまゝには、ついに消え失せざるを得ない。むしろこのような場合、私たちが宗教的な表象をしかと把えて霧散させまいためには是非必要な解答を得たいと望んでも、ゲーテはしばしば回避的である。

次にゲーテにとつて、精神の極致は、惜みなく頌ち與える、崇高な、精神的な愛の力であつた。一切はこれによつてはじめて透明となる。精神的な愛の力は、天上から神から由來し、神々しい者からの賜物である。だが、かのキリスト教的言葉の愛 *agape* はここでは當籤らぬ。むしろ私たちは、プラートンの言葉をかりて、ここではロゴスのうちに超官能的な宇宙力となつてエロスの優位が看取されると、言つたほうがよいであらう。精神的な愛は、超官能的な接觸の最も高貴な證に他ならぬ。これなくしては、一切が崩壊する。この精神的な空間において、はじめて最高の價值經驗への突破が行われうるのである。ゲーテのきわめて力強い詩篇はここから生まれ、私たちは「最高の幸福の豫感」を與えられる。それこそ最上のものであり、何人も「この最上のものを、神と、まさしく自らの神と名づける」(「序言」) であらう。

III

とは言え、現存在の緊張は、ゲーテによつてもけつして簡単に解かれはしない。彼自らも生の悲劇的な兩面性に悩んでいる。ゲーテは現世の狭苦しいなかの薄明を知つていた。この内面界の緊張のために、彼のなかにも、もし粹を外されて絶對化されれば忽ち解體的な作用を發揮するような諸傾向が、くすぶつていたのである。しかし、彼はその危険を知つて、巧みに抑えていた。

それゆえ、ゲーテにたいして三つの質問を呈すでしょう。まず第一に、世界の現存在の存在的層において、第二に、人間學的點において、すなわち人間に關して、ゲーテはこの對立性にいかに答えるか。そして第三に、彼が私たち自身に教えんとするものはなにであるか。

ゲーテによれば、光にみちた存在に對抗するものが、自然のなかの隱秘な暗鬱な諸力であつた。あるいは、自然の裏面と言つてもよい。これらの諸力は、永遠な旋回であり、騒ぎ狂う醉態であり、煽動的な亂痴氣である（「ヴァルブルグスの夜」）。すなわち、これらに相應するのが、ドイツ、オーストリア、フランスの世界感情である。忘我的な激情、ついには狂氣にまでも高まつてゆく感情的な没我である。陶醉、爆發的な發作、獸性が完全に優勢を占めるところの飽くことない激情など、いずれも危険な根元力にはかならぬ。しかも、それがしばしば一切の限界を押し流す壓倒的な勢いで現われ、ついには昂じて神への敵となる。したがつて、隱秘な大地の力である。

メフィストは知性的領域におけるこの代表者であつた。

それゆえ、貴方が罪惡とか破壊とか

一言で言えば、惡と稱するところのものが、

實は私自身の本領なのです。

〔ファウスト〕第一三四二行)

だからこそメフィストの供に、鼠とか蠅とか蛙とか南京蟲などが加わるのである。

私は絶えず否定する靈です。

それも當然の事で、生じ来る一切のものは

また滅びゆくだけの値打があるからです。

(同第一三三八行)

メフィストの精神は、高度な精神文化を破壊するのを主義とし、純粹な本能の力に頼る。すべては私たちがすでに體驗してきたものである。

なんでも、理性だの知識だのと言う

人間最高の力を、輕蔑するに限る。

まやかしと魔物細工に没頭して、

虚偽の靈から力を貰うがいい。

そうなりや、すつかりこつちのものだ。

〔ファウスト〕第一八五一行)

こうして、私たちは「希望に呪いあれ、信仰に呪いあれ」と叫ぶようになったのであつた。

しかしながら、かの自然力の世界の低地帯は、たんに通過驛にすぎないのである。私たちは官能的世界から超官能的世界へ、下から上へと登つてゆく(「西東詩篇」参照)。かの高みには、清純な光、秩序ある世界 Kosmos による混沌 Chaos の克服、精神の理想像がある。ここに到つて、私たちは神の息吹に打たれ、ついには「永遠なる愛を眼のあたり見ながら宙に浮かび、やがて消え失せてゆく。」

私たちは、れぐれも次のことに留意せねばならぬ。すなわち、かような反精神的な力への墮落は、殊に私たちが、極く最近の過去のうちに、ただ生成の絶對權、力の絶對權を、生命の動力と偉大な人物の自己中心的な我欲との絶對權をのみ主張するような場合において、きわめて容易に起り得るのである。ゲーテのファウスト的衝動は、この反精神的な力に負うところ多大であるように見える。

とは言え、自らの淨化につとめるファウストは、放縱な雑多な一時的な努力を欲しもしなければ、不安や不穩や盲滅法な暴舉を望みもしない。彼は感情を無際限に吐露して、所詮はかない徒勞に終ることを好まない。かかる意志の獨りよがりな發動力とか、かような欲求は、ついにはすべてを相對化せずにはおかぬ。私たちの現存在の基盤を腐蝕し、生暖い風のようにすべての精緻な構造を破壊するのである。

圓熟せるファウストが求めるものは、これに反して、永續性であり、永久に妥當な存在である。彼は約束の地アルカーディエンでの歡喜にみちた滞在を好む。だからこそ、ファウストは低級な力から脱け出て、人間的な歸還を成しとげるのである。もはやここに到つては、行爲の單獨な評價は問題にならぬ。大切なのは、完遂の價值である。言葉、意義、力、行爲というあの「ファウスト」書齋の場での順序は、むしろここでは逆に並べられるのである。

ゲーテもまた、すでに明らかなように、このために戦つてきたのであつた。しかし、彼の精神の基部は、とおく遡つて、中世盛期の普遍的教養と古代とが遺した遺産に根ざしている。それゆえ彼にとつては、内面的な進歩が増せば増すほど、生成ならびに生活のほうも、精神的な導きにますます服するものとなるのである。ただそのとき、價値の差があるにすぎない。ニーチエが純粹な「生成はまつたく價値を受けつけぬ」と言つてゐるのは、正しい。量、純粹な動力ないし純粹な力もまた、同様である。だからこそ「プロメーティス斷片」においても、「あの人の手はさまざまの寶玉をもたらす」と語られ、またそれを受けて「どの財産も私にはみな等しいように思われる」と結論しているのである。

これに反し、私たちがゲーテにおいて學ぶのは、量的な均等性にたいする感覺ではなく、位階(Rangordnung)およびその形式にたいする感覺であり、たんに平面のみに止まらず垂直なものにたいする感覺、上昇そのもの、すなわちギリシア語で言う *aei epanienai* にたいする感覺である。したがつて、差異の否定にたいする感覺ではない。私たちは、ゲーテと共に歩むことによつて、自然のうちなる、整然と系統立てて限定する精神にたいする感覺を、ふたたび獲得することができる。しかも、眞のエロス現象は、すべてこの自然のうちなる精神に結びついているものであつて、けつしてたんに盲目的な衝動的なものにたいする感覺ではないのである。こうしてゲーテは、精神的な視界をば、すでに私たちが見てきたように、きわめて奥妙に自然の生々たる源泉に結びつける。自然と精神である。彼はこのいづれの領域においても無籍者ではない。それゆえ、彼の精神態度は、私たちにとつて、純粹な力本説とか主意説、能動的な虚無主義からの解放に他ならぬ。すなわち、いかなる當爲をもはや知らず、ただ知性に倦み疲れた者が辯明の如何に拘らずひたすら身を委せるところの、あの放縱な力の優位からの解放である。この者こそたしかに、かような度外れな行爲によつて、すべての規準を完全に相對化してきたわけである。

ところで、ゲーテはこのようにして秩序の存在(Sein der Ordnung)とその精神的意義に向うのである。「存在によつて汝を幸福に維持せよ。」存在は永遠である。だが、「永遠なるものは絶えず凡ゆるものなかで活動し續ける。」とは言え、それは生成とは無關係である。存在と生成は現存在の兩極に他ならぬ。生成ならびに變化は、存在者の新しい成就すなわち永遠に時間を超えた形式賦與が行われるかぎりにおいてのみ、意義あるものである。ゲーテはしたがつて、ヘラクリート派(もつぱら生成 *panta thei*)であるとともに、またエレア學派(もつぱら存在 *hen kai pan*)でもある。このことは、自らが西歐の完全な市民であることを立證したあの古典主義的轉回によつて、ゲーテ自身も明らかとなつていた。古典主義的轉回はイタリー旅行の結果である。こうしてゲーテは事物の本質を見ぬく眼を得たのである。

IV

これまで私たちは存在論的見解を、存在相を引き出してきた。同じようなことは、いまや人間學的見解のもとでも當倣るのである。問題性はふたたび、ファウスト的衝動ないし浪漫主義的熱情とアポロ的精神形式との對立というかたちで、現われるのである。

浪漫主義的熱情は概して私たちの本性に近く、特に私たちが有する若々しさに密接している。ニーチエもまたゲーテについて「彼には浪漫主義的魂がある」と言っている。ここでは、動力のかわりに内なる激動が多分に現われるのである。その特色を簡単ながら擧げてみよう。浪漫主義的熱情は憧憬によつて規定される。浪漫主義的人間は、漚しない海原とか盡ぎることのない旋律、悲痛や哀愁を呼びさます無邊際を愛する。それは、遠離の無限への觀入である。ノヴァーリスにとつて、哲學は郷愁であつた。したがつて、浪漫主義的人間はその主觀的な内面性に立籠り、悲壯に孤獨となる。凡ては悲痛な對立性に終るのである。

それにしても浪漫主義者にとつて、精神的形式はいかなるものと目されるであらうか。精神的形式は、罪惡的な限局、窮屈な獄舎、生の充溢からの逃走にはかならない。それゆゑ浪漫主義者は、完成につとめる形式すべての破砕を要求し、放縱な精神をしか知らないのである。

ところが、今日もなおローマン語系の國々に特に残っているラテン精神の古典的なるものは、まったくこれと違ふのである。この古典的なるものは、限られた纏まりにたいする満足とか、是認を目ざし、憧憬ではなく、成形と完成欲に立向う。生成ではなくして、水平的な存在が飽くまでも決定的である。ここでは、節度とか限定、精神的秩序の驚異ならびに、調和に終始私たちの心構えが向けられている。多年生の存在體が探求される。存在體はまさしく「在る」のであつて、「成る」のではないのである。これこそまたゲーテの言わんとするところでもあつたらう。尤もこ

の態度は、後期の反古典主義的時代に入ると、多分に薄れはするが。

それゆえ目標は、消滅とか遠離ではなくして、近接であり、具象的な現在性である。したがつて究極的なものは、ここでは夜ではなくて、プラトーンもすでに語っているように、光にみちた精神に他ならぬ。言うまでもなく、概念をもつてまつたく光と同じように諸輪廓を浮き立たせるところの、精神の明澄性である。これあるがために、私たちはまた造型美に富む形象を物することができるのである。それゆえ古典的なものと密接なのは、要するに、クラークスにおけるような、不斷に滅びゆく世界の純粹な律動としての生の限らない繼續ではなくして、超時間的な要求をもつて自らの實現をはかり、自らによつて不變に存立する存在である。そしてこれが、生起の變轉する形姿のなかから、恒久なものを探し求めるのである。

究極的な理解に達するために、さらにいくつかの比較を試みるとしよう。古典主義的思考は混沌 (Chaos) を嫌悪し、秩序ある世界 (Kosmos)、諸力の均衡を尊ぶ。例えばハイデッガーが彼のヘルダーリン小論において、混沌は聖なるものそのものであると、書いているとしても、混沌は古典主義的態度をとる者にとつては元來の敵である。神秘的な衝動的な非合理性でなくして、観ることが、理性の洞察 (das intus legere der Ratio) が、古典主義的態度の人間にとつて大切なわけである。あるいは次のように言つてよいかもしれぬ、浪漫主義的な道は、深みへの道であり、深みに達して初めて眞の價値が與えられるにひきかえ、古典主義的な道は高みへの道である、と。私たちはすでに浪漫主義の危険を見てきたが、古典主義の危険は、しかし、現實の單純化にある。現實を單純化しては、往々にして存在者の假面しか掴めず、生の充溢が把握できないのである。

V

ところで、この双方に屬しているのが、ゲートルである。ゲートルはいかなる道によつてこのジレンマから私たちを連

れ出して、くれるだろうか。ゲーテは實踐的にいかなる人間性の範を私たちに示してくれるであろうか。彼は、所謂フアウスト的衝動と古典主義的の對立を調和して崇高な結合に達せしめるために、兩者の中(Mitte)を探し求める。すなわち、浪漫主義的の深みと古典主義的の、高みの統一を探索するのである。深みは、ここでは内奥とか、下降、参入を意味し、高みは、上方とか、天上、上昇を意味する。しかしながら、精神の深みというものもある。それは可能である。たしかにいかなる高い地勢においても私たちは深みに出會うからである。その深みは、言わば今後の完成への飛行に他ならぬ。とは言え、高みへ導いてくれる魂のエネルギーも、精神が否定されれば、またそのまま深淵へ私たちを連れ去ることもあるのである。

さて、ゲーテ的人間は、すでに見てきたように、意識的に魂のいくつもの深淵を體驗し、切迫した危難を嘗めつくして、私たちの青年がすでに過ぐる年月に耐えてきたようなきわめて苛酷な試煉に立向う。ゲーテはまた、現存在のただなかでいつ口を開くかもしれぬ矛盾にみちた深淵性についても、よく知っていた。彼が危険な形容しがたい諸力を堂々とともに正視したのも、じつはそれだけさらに深く、精神的な上昇の自由な行路へ足を踏み入れるために他ならない。生のかの隅柱のために戦つたことなく、「悲しい夜毎を寢床に坐つて泣き明かした者には、おお、神々しい諸力よ、おまえたちが分つてないのだ。」

フアウストにおいては、あらゆる苦境を通りぬけて救済の確信に達するまで、再試煉ならびに淨化が相次いで行われる。むろん、特にキリスト教的意味での宗教的な救いにたいする感覺はここにはない。したがつて、フアウストの志すところは、自己自身の形成を成就することであり、精神的な生の意義を探索することであり、彼は彼の古典主義時代の實存的な洞察として精神の優位を伝える。彼は、解放的な神々しい精神が有する卓越した形成力にたいする明確な確信に、くまなく充たされているのである。ゲーテが私たちを案内してくれるのも、まさしくこの境地である。私たちはいまや遅しと期待しているわけであるが、ゲーテのごとき人物のもとでこそ、實現を渴望する魂の飢えは、

はじめてその内容が得られるのである。

ところで私たちは、かの緑の蛇についての有名な童話においてもやはり、こうした問題性にぶつかるのである。いまその童話のあらましを述べれば、三人の王がそれぞれ自分の持つている最上のものがある青年に與える。青銅の王は一振りの劔を與え、青年の左手に持たせる。白銀の王は、美の象徴として、笏を青年の右手に取らせる、一般に美はヘーレナという高貴な女人像によつて具現されているのであるが、黄金の王は、「最高なるものを認識せよ」という言葉を添えて、櫛の冠を青年の頭上に戴かせる。ところが、放埒で、三つの金屬がすべて變則に混ざりあつてゐる、第四の王には、なにひとつ與えるものがない。——青銅の王は意志と行爲を授け、白銀の王は、美的なものによつて、またそれを和げる。美的なものは、けつして柔弱ではなく、高度な意味においての力づけであり、これこそ眞にギリシア的な思想である。そして最高者たる黄金の王は、悟性を惑わす鬼火のかなたの、完成された精神へと導いてゆくのである。ここに語られた金屬で、すでにひとつの位階が示されている。すなわち、行爲への意志、そのうえに位するものが美と感情、そして最後が精神と思考である。そこで、「たしかに私たちの父祖の國は壯麗であり堅固である。だがおまえは、さらにそれよりも古くて一般的な、第四の力を忘れてゐる」と、言うことになる。第四の力、それは「愛の力」である。愛の力をうけて、凡ては普遍的なものにまで高められる。それは壓倒的に擴がつてゆく統一であり、愛しつゝ認識することから生れる思考と行爲である。對象は、愛することによつてのみ、認識できる。(Res tantum cognoscitur, quantum diligitur) とは、すでにアウグスティヌスの言葉であつた。最高の精神的な行爲は、したがつて、あらゆる力の結合であり、この結合が評價を受けるのである。行爲への呼びかけ、情感の高まり、精神的な觀察。それは、私たちの西歐的な文化の傳統の言葉である。だからこそ、すでにブライトン、アウグスティヌスが、さらに心の秩序なる言葉をもつてパスカルが、語る事ができたわけであり、いままたゲーテも語るののである。ところで、西歐的人間として、ゲーテは、私たちになにを教えてくれるのだろうか。縮めて言えば、本能的、し、意志

にたいする精神の優位に他ならない。すなわち、下方とともに上方、惡魔的なものとともに神々しいものがあるにしても、差異を忘れてはならぬと言うわけである。方向は、順次段階をたどつて神々しい精神へ立向う方向でなければならぬ。本能的な衝動的な生成的な力が、たとい精神の空間へ入り込むことがあつても、精神に疑いを挟んだり精神の首位を侵害したりしてはならぬ。それゆえ私たちは、私たちの本性に固有のファウスト的衝動を、それが精神を蔑視しないかぎりにおいて、保持せねばならぬ。それは、深みへの衝動、充溢への衝動であり、根元的基底への探求であるとともに、また生成し發達する生命の諸要素にたいする献身とも密接と結びついているのである。

なお附言しておくならば、古典主義的思想とは、精神による指導と支配、秩序、形式、恒常性とか妥當性とか客觀的眞實とかの價値である。それは精神とその意義にたいする信仰に他ならぬ。

したがつて、所謂ファウスト的衝動ないしこれに類似の浪漫主義的熱情と形成とは、形成的な精神の優越のもとで、たがいに補足の必要を確信しているのである。ゲーテの究極的叡智は、この兩者の創造的な結合にあつた。兩者の完き調和は、限りある現存在においては許されないとはいえ、私たちの精神はさらに現存在を越えて進み、私たちを超世界性の闕へまでも導いてゆく。そうして、そこで有限性の形骸を脱するのである。

とは言え、私たちはしかし、獨占的に支配權を握ろうとする近代の機械的な自然學の精神にたいしては、これを告發せねばならぬ。この精神は、反作用となつて、下層の人間をあまりにも大きくのさばらせた。そのため、人間の内在する動力、感動性、情感的なものがまたあまりにもひどく抑壓されすぎたのである。そこで、シェーラーの言葉を借りて言えば、「人間のうちなる自然性の叛亂、暗い本能的な衝動的なもの一切の叛亂」が起らざるを得なかつた。「子供の大人にたいする、……無意識なものの意識にたいする、物そのものの人間および人間の悟性にたいする叛亂である。それがいつかは起らねばならなかつた……そうして、いまそれが起つているのである。」

「いつかはついにあらゆる慰めを、あらゆる神聖なものや救いとなるものを、またあらゆる希望を、隠れた調和や

未來の幸福ならびに正義にたいするあらゆる信念を、すべて犠牲にせねばならないのではなかつたか。神のものをも犠牲にし、自らにたいする慘酷な仕打のあまり、石や愚昧や重壓、運命や無を崇拜せざるを得ないのでなかつたか」とは、ニーチエの問いであつたが、私たちは、すでに、そのすべてを體驗してきたのである。

眞の生々潑潑たる充實した古典主義的精神のかような輕蔑者どもにたいして、私たちは、次のようなフィヒテの言葉を浴びせよう、「君たちは、君たちの生活において一度も知ることがなかつた。だから、現に知つている者がいかなる氣持でいるかを知らないのだ。」

要するに、ゲーテが私たちから要求するのは、單なる知性以上のものであるところの、生命に結びついた精神の復活である。かような精神は、エロスによつて産み出された能動的な現實であり、しかもまた、衝動とさまざまの生命力との世界を経てきたところの精神でもある。古典主義的人間としてのゲーテ、人生觀ならびに世界觀の大家としてのゲーテ、普遍的な思想家ならびに詩人としてのゲーテが私たちに教えるのは、このようなことである。

(了)

(筆者 獨逸マインツ大學〔哲學〕教授・譯者 京都大學文學部〔獨逸語學獨逸文學〕助教授)

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.

Das Bild des Menschen bei Goethe

von Fritz-Joachim von Rintelen

Goethe spricht noch heute zu unserer Zeit, weil er nicht nur einen abstrakten, sondern einen lebendigen, einen dem Leben verbundenen Geist kennt. Bereits in der Natur tritt uns Geist als ordnende Macht in ihrem Wachsen und ihren die Seele beglückenden Geheimnissen entgegen, bis wir uns zur göttlichen geistigen Liebesmacht als einigendem Band von allem erheben. Es gibt aber auch die zerstörerischen, ungebundenen Gewalten in der Natur, die Goethe glaubt nur durch die ordnende Dauer und Gültigkeit beanspruchenden ordnenden Formen des lichtvollen Geistes gebändigt zu sehen. Der gleiche Gegensatz bietet sich auch im Menschen, in welchem die eine Seite ihn in den dionysischen Überschwang herabziehen, die andere ihn in die Sphäre klassisch-geistiger Höhe erheben möchte. Aber Goethe sucht immer die Synthese, denn die klassische Höhe bedarf für ihn immer der Ergänzung durch romantische Tiefe, welche in die verborgenen Wurzeln triebhafter Daseinsweise herabgreift. Aber das Entscheidende bleibt, dass für Goethe die geistige Gestalt stets den Vorrang vor dem unbeherrschten Willen und der Welt sinnenhafter Dynamik behält, wodurch er sich als Bürger klassisch-humanitärer Haltung offenbart.